

# 「総合的な学習の時間の指導法」に関するオンデマンド教材の運用 評価

小柳 和喜雄  
(奈良教育大学 名誉教授)

An Operational Evaluation Report of On-Demand Materials for “Teaching Method on the Period for Integrated Studies”

Wakio OYANAGI  
(Professor Emeritus, Nara University of Education)

**要旨：**本研究では、オンデマンド教材の運用評価を通じて、1) 対面になったときにも生かせる教材の内容や構成、語りかける言葉や問いの方法を探ること、2) 希望校種や専修の異なる学生に対して、どのように、「総合的な学習の時間の指導法」を展開していくか。そのクラス分けの方法に生かせる知見を引き出すことを目的としている。結果として、オンデマンド教材で、ある程度、内容構成の工夫で受講生に共通に伝えたい内容の理解を導くことは可能であるが、その内容を自分ごとの理解や論議に導く上で、課題内容に関わって受講生の行為行動を導く問いかけの表現が意味を持つこと、校種よりも専修でクラス分けをした方が議論が活性化される可能性のある問いかけもあることが明らかになった。

**キーワード：**総合的な学習の時間の指導法 Teaching Method on the Period for Integrated Studies  
オンデマンド教材 On-Demand Materials  
教材の運用評価 Operational Evaluation of Teaching Materials

## 1. はじめに

教育職員免許法及び同法施行規則の改正が行われ、2019年度以降にその対応が求められて久しい。そこでは小学校、中学校、高等学校の教諭の免許取得に関わって、教職課程の科目「道徳、総合的な学習の時間等の内容及び生徒指導、教育相談等に関する科目」に「総合的な学習の時間の指導法」(1単位)が位置づけられた。学習指導要領に記されている小学校と中学校の「総合的な学習の時間」の目標は同じであり、高等学校の「総合的な探究の時間」の目標の記述内容は一部異なる。児童生徒が経験し学んでいる内容や発達、目標の違いを勘案し、養成機関は、免許申請とも関わって、適宜「総合的な学習の時間の指導法」の講義を、クラス分けして実施している。

その実施と関わる最初の時期に、感染症への対応が強く求められる事象が生じ、教員養成を担う多くの教育機関では、オンラインでの対応を余儀なくされた。しかし学習指導要領が掲げる3つの資質・能力の柱に向けて、授業過程と学習過程を絶えず改善をしていく視点として「主体的・対話で深い深い学び」が語られる中、本指導法に関する科目においても、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れることが求められた。そのためWWW会議システムを用いたオンライン同期型による講義の工夫、オンデマンド非同期講義と対面の講義を併

用するなど、感染症への対応が問われる中で、この数年間で、様々な実践が工夫されてきた。たとえば、「総合的な学習の時間の指導法」について、CiNiiリサーチを用いた検索結果によれば(図1)、次のような関連先行研究が2017年からすでに報告されてきた。1) 教職科目における本科目の位置づけ、意義の検討(岡明2017)、2) この科目で取り上げる内容についての事例の紹介(元根2018)、3) この科目でアクティブ・ラーニングを行う方法の検討(白井2021)、4) 探究的な学習活動に向けての構想事例の紹介(小池2021)、5) この科目に向けての学生の意識や経験の事前調査結果の報告(松崎2020)、6) 大学でどのように組織的に運営していくかの検討(宮崎2021)、7) 学生の学びの姿から、実施内容や方法の検討を行う研究、(宗形2022)などである。

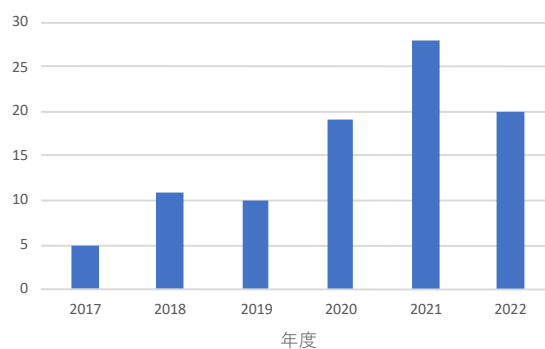


図1 年度ごとの論文・報告数の推移

とくに 7) に関しては、2019 年実施以降、その試行の結果の報告や実際に運用していく際に、リフレクシオンノートの利用など、様々な道具の活用の検討等が行われてきた。そして感染症対応が求められた 2020 年と 2021 年には、本格実施をした結果の報告、学生の意識調査の報告、それらに基づく実施計画の改善の検討、評価方法の検討、などが積極的に行われ、その報告本数は増えてきている (2022 年 10 月末現在)。

## 2. 目的

本研究は、先に述べた関連先行研究との関係で言えば、「7) 学生の学びの姿から、実施内容や方法の検討を行う研究」に位置づく。またオンデマンド非同期講義と対面の講義を併用した「総合的な学習の時間の指導法」の講義を対象とした事例研究となる。

研究上の問いは、(1) 総合的な学習の時間及び総合的な探究の時間について、オンデマンド教材が、免許取得希望の校種を越えて共通するその学習の見方考え方や学習活動のデザインの方法、マネジメントの方法などを導くことと関わって、どの程度受講者の理解を導くことが可能か。その際どのような内容や方法の工夫が必要か。(2) 校種や専修を意識してオンデマンド教材に入れ込んだ内容事例が、どのように受講生には受けとられるのか、である。

そして、この問いに応えることと関わって、その時々学生の様子から臨機応変に切り替えられないオンデマンド教材だからこそ逆に見えてくる、教材の内容や構成、語りかける言葉や問いの方法を探り、対面講義で生かせる、目的に応じた尋ね方のアイデアを明らかにすること。そして対面の講義を行う際、アクティブラーニング的な指導法を体験的に導くために受講者人数規模を考え、クラス分けなどが行われるが、目的に応じてどのような分け方があるかを明らかにすること、に関心を向けた。現在、教員養成を主目的とし複数教員免許申請に対応している教育機関では、校種を中心にクラス分けされて講義が行われている場合がみられる。しかし指導法を導く目的によっては、専修の異なる学生を中心としたクラス分けが有効となるかもしれない。そのため目的に応じたクラス分けに参考となることを考えることへ関心を向けている。

したがって本研究では、1) 対面になったときにも生かせる教材の内容や構成、語りかける言葉や問いの方法を探ること。2) 希望校種や専修の異なる学生に対して、どのように、「総合的な学習の時間の指導法」を展開していくか。そのクラス分けの方法に生かせる知見を引き出すこと。以上 2 つを研究の目的とした。

## 3. 方法

研究の対象としては、表 1 に示す全 8 回の総合的な学習の時間の指導法の時間 (10 月から 11 月に開講) の

うち、第 2 回から第 5 回の 4 回分の理論編部分を取り上げることにした。この理論編部分は、実践場面でアクティブラーニング的指導法を発揮できるように、第 6 回から 8 回の実践的講義の時間で取り扱う体験的内容につながる基盤となる専門知識を学ぶ機会となるようにデザインされていた。しかし Covid-19 の影響も続いていたこと、9 月の教育実習期間が受け入れ校により後ろに期間が延びることへの対応など諸事情もあり、この理論部分に関して、オンデマンド教材を開発し、柔軟に学習機会を保証をすることにした。そのため、本研究では、こうして行われることになったオンデマンド教材を用いた講義期間を対象とした。

本研究の参加者は、A 大学の教員養成課程の学生約 250 名 (校種を中心にこれを 2 クラスに分けて開講) である。2021 年 10 月から 11 月の期間、オンデマンド教材の運用評価に参加、協力をしてもらった。具体的には、以下のような計画の下、調査を進めた。

表 1 総合的な学習の時間の指導法の講義計画

第 1 回	総合的な学習の時間の意義と役割
第 2 回	学習指導要領における総合的な学習の時間の位置づけ
第 3 回	総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメント (指導計画と実施計画)
第 4 回	総合的な学習の時間の単元計画の作成
第 5 回	総合的な学習の時間の指導「理解させる指導」からの転換
第 6 回	探究的な学習の過程の構成 (1) 課題設定・情報収集
第 7 回	探究的な学習の過程の構成 (2) 整理分析・まとめ・表現
第 8 回	総合的な学習の時間における学習評価

表 2 調査用に開発した教材の課題の問いかけ

講義	内容	問いかけ
第 2 回	学習指導要領における総合的な学習の時間の位置づけ	Q.2-1 1998 年告示～2017 年告示の間、3 回の学習指導要領の改訂で、総合的な学習の時間はどのように変わってきましたか。ここまでの資料に基づき、明らかにしたことをまとめてください。
		Q.2-2 総合的な学習の時間は、各教科学習、特別活動、道徳教育とどのような関係にあるのか？ Q.2-3 どのような点に気をつけて、また工夫をして、学校で総合的な学習の時間を実践していこうと考えますか？
第 3 回	総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメント (指導計画と実施計画)	Q.3-1 ESD の考えに基づいて、学校の総合的な学習の時間をカリキュラム・マネジメントするということはどういうことか、自分の理解を説明してください。
		Q.3-2 A 中学校区の総合的な学習の時間のカリキュラムの編成例から、その指導計画と実施計画の工夫を読み取ってみましょう。
		Q.3-3 あなたが総合的な学習の時間の年間指導計画を提案するとき、単元配列 4 つの型のどれを薦めますか？その理由をまとめてください。(ある校種を取り上げた事例あり：小中を含む中学校区)
第 4 回	総合的な学習の時間の単元計画の作成	Q.4-1 資料などに基づいて、総合的な学習の時間の単元設計の手続きについて、自分の言葉でまとめてみましょう。(ある校種を取り上げた事例あり：小学校)
		Q.4-2 信頼される評価と関わって、ここまでの資料を参考に、どのような目的のときに、どのような評価方法を選ぶのか、あるいは組み合わせて用いるのか、あなたの考えを整理し、まとめましょう。
		Q.4-3 総合的な学習の時間における学びの評価について、単元レベルの評価の場合、何を大切にし、留意して、どのように進めたいのか。
第 5 回	総合的な学習の時間の指導「理解させる指導」からの転換	Q.5-1 総合的な学習の時間の単元設計において、「探究的な学習」と「PBL (Project-based Learning)」と「ICT等の活用」の関係は、どのような意味を持つと、あなたは考えますか？
		Q.5-2 この総合的な探究の時間の学習の流れ (展開)、課題設定シート、選択肢カードなどについて、あなたはどのように考えるか？さらに工夫した方が良い点はあるか (ある校種を取り上げた事例あり：中等教育)？
		Q.5-3 A 中学校の総合的な学習の時間の取り組みは、Cross- or multidisciplinary、Interdisciplinary、Transdisciplinary の 3 つのうち、どのアプローチに近い取り組みと見えるか？資料を下に根拠を説明しながら、あなたの考えを述べてください。(ある校種を取り上げた事例あり：中学校)

講義の目的とコンテンツの内容に即して、オンデマンドのビデオコンテンツを12本開発し(各回に3本×4講義分)、それぞれに課題(12の課題)を設けた。調査で開発した教材に対する課題への問いかけは表2示すとおりである。

データ収集の方法としては、12の課題に対する学生の回答内容をA大学のMoodle(Modular Object-Oriented Dynamic Learning Environment)を用いて収集することとした。各回3つの課題に対する回答を、学生はワークシート(Microsoft Word)に記載し、それを毎回、期日(次の講義まで1週間)までに掲示板に投稿する形式である。

データ分析の方法としては、収集した学生の課題の回答(テキストデータ)を探索的に研究目的に即して分析を行う意図から、テキストマイニングを用いて分析を行うことにした。テキストマイニングを行うツールとして、フリーツールであるKH CoderやRによるテキストマイニングが良く用いられている。

しかしこの度は、以下3つの問い、とりわけ3つ目の問いについて考えていくために、テキストマイニングツールでよく用いられている「単語出現頻度」「共起ネットワーク」「階層クラスタリング」などを用いて比較分析することは困難であった。

3つの問いとは、1)指導法の理論に関する共通部分について、目的に即して受講生の理解を導いているか。2)理解を導く内容や問いかけの工夫は機能しているか。そして3)校種・専攻による受けとめ方、理解の仕方どのような違いがあるか(上記1)と2)を校種・専攻ごとに見ていく)、である。

結果から類似点と差異点を視覚的に確認できるが、校種・専攻ごとにキーワードマイニングを行うと、そこで描画される資料数があまりにも多く、そこから特徴的な受けとめ方の違いを分析し見出ししていくことが困難であった。

そのため探索的な研究の入り口として、この度は、重要単語を多く含み、他の文に類似度が高い文を抽出する自動要約機能を用いて、校種・専攻の「要約文」を比較検討、そして解釈することが適切と判断した。そこで、その機能を持つUserLocal AIテキストマイニングを用いることにした(<https://textmining.userlocal.jp/>)。

なおUserLocal AIテキストマイニングビジネス版の開発元である株式会社ユーザーローカルは、早稲田大学の研究をもとに生まれた、人工知能・ビッグデータ分析に特化した技術ベンチャー企業である。「ユーザーローカル自動要約ツール」は、内部的な仕組みとして、重要文抽出にはLexRankという技術を利用しており、重要単語を多く含み、他の文に類似度が高い文を抽出するアルゴリズムで動いている。要約アルゴリズムには整数線形計画法という手法を利用し、より多くの情報をカバーした重要な部分を選出している。

#### 4. 調査の結果と考察

#### 4.1. 指導法の理論に関する共通部分について、目的に即して受講生の理解を導いているか。校種によって受け止め方に差(特徴的な表現)はあるか?

表3は、12の課題について、オンデマンド教材がどのような受講生の理解を導いたか。校種の違いによって、その受け取り方に差がみられたかを、テキストマイニングの要約機能を用いて分析した結果を示している。表4は、その第2回と第3回及び第4回と第5回の一部に関わって、特徴的な結果を示した部分(下線斜字体)を示している。

他の4回と5回も同様に結果の分析を行い、全4回、12の課題に対して、校種によって受け止め方に差(特徴的な表現)があったか、を1つの表にまとめたものが表3である。記号に関して、○:就学前・初等と中等の両方に特徴的な説明がみられる。△:どちらか一方に見られるを示している。

表3と表4に示す結果から以下のことが読み取れる。

表3 校種によって受け取り方に差がみられる課題

講義	内容	問いかけ	特徴表現
第2回	学習指導要領における総合的な学習の時間の位置づけ	Q2-1 1998年告示~2017年告示の間、3回の学習指導要領の改訂で、総合的な学習の時間はどのように変わってきましたか。これまでの資料に基づき、明らかになったことをまとめてください。	
		Q2-2 総合的な学習の時間は、各教科学習、特別活動、道徳教育とどのような関係にあるのか?	○
第3回	総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメント(指導計画と実施計画)	Q2-3 どのような点に気をつけて、また工夫をして、学校で総合的な学習の時間を実践していこうと考えますか?	○
		Q3-1 ESDの考えに基づいて、学校の総合的な学習の時間をカリキュラム・マネジメントするとはどういうことか、自分の理解を説明してください。	○
第4回	総合的な学習の時間の単元計画の作成	Q3-2 A中学校区の総合的な学習の時間のカリキュラムの編成例から、その指導計画と実施計画の工夫を読み取ってみましょう。	
		Q3-3 あなたが総合的な学習の時間の年間指導計画を提案するとき、単元配列4つの型のどれを薦めますか?その理由をまとめてください。(ある校種を取り上げた事例あり:小中を含む中学校区)	○
第5回	総合的な学習の時間の指導「理解させる指導」からの転換	Q4-1 資料などに基づいて、総合的な学習の時間の単元設計の手続きについて、自分の言葉でまとめてみましょう。(ある校種を取り上げた事例あり:小学校)	
		Q4-2 信頼される評価と関わって、これまでの資料を参考に、どのような目的のときに、どのような評価方法を選ぶのか、あるいは組み合わせで用いるのか、あなたの考えを整理し、まとめてみましょう。	○
第5回	総合的な学習の時間の単元設計	Q4-3 総合的な学習の時間における学びの評価について、単元レベルの評価の場合、何を大切にし、留意して、どのように進めたらいいか。	△
		Q5-1 総合的な学習の時間の単元設計において、「探究的な学習」と「PBL(Project-based Learning)」と「ICT等の活用」の関係は、どのような意味を持つと、あなたは考えますか?	△
		Q5-2 この総合的な探究の時間の学習の流れ(展開)、課題設定シート、選択カードなどについて、あなたはどのように考えるか?さらに工夫した方が良い点はあるか(ある校種を取り上げた事例あり:中等教育)?	△
		Q5-3 A中学校の総合的な学習の時間の取り組みは、Cross- or multidisciplinary, Interdisciplinary, Transdisciplinaryの3つのうち、どのアプローチに近い取り組みと言えるか?資料を下に根拠を説明しながら、あなたの考えを述べてください。(ある校種を取り上げた事例あり:中学校)	

直接自身が免許取得を考えている校種の事例だけでなく、他の校種を取り上げた内容説明や資料提供がなされている問いとして、(Q.3-3)(Q.4-1)(Q.5-2)(Q.5-3)がある。(Q.3-3)の他は、提供されている校種の文脈に即して考えることが求められている。しかし(Q.3-3)の場合は、自身の校種の文脈に引き付けて回答できる。そのような条件下で、説明を聞いて資料分析して、自分ならどれを薦めるか判断させ、その根拠を考えさせる問いかけの場合、受講生には受け入れられる傾向があること。それは要約からも読み取れる(自分ごとの思考を活性化させる問い)。

また(Q.2-3)のように、説明を聞いて、資料を読み取って、自分のアイディアをまとめて表現させる問いかけは、校種ごとに異なる理解や表現をすることを導く可能性が



あることが、要約文の比較の結果から読み取れた。

一方で (Q.2-1)(Q.3-2) のように、説明を聞いて、そこで書かれている事実の理解に向けてまとめさせる問いかけや、(Q.5-3) のようにある校種の事例を取り上げ、説明を聞いて資料を分析して根拠を挙げながら問いに対する解釈を求める問いかけは、特徴的な表現が生まれにくく、校種共通に同じ内容の回答記述になる傾向が読み取れた。

このことから、事実理解を導くことは講義にとって意味あることではあるが、このような問いかけで、論議をさせ、思考を活性化させることは難しい問いかけであることが予想された。つまり考えれば当たり前のことかもしれないが、事実確認を要約させるような問いかけは、必要ではあるが、そこから論議につなげる場合、もう一段、問いかけに仕掛けを行わないと、すぐには論議へつながらない。対面講義で仮にこのような問いを発した場合、学生はその場で状況を考え、教員の表情を読み取り、少しの違いを出す応答をすることもかもしれないが、教員がその違いを理解を深めるために取り上げ視覚化したり整理しないと、学生の思考をアクティブにすることは容易でない問いであると考えられた。

このようにある理解を導くこと、それを確かめるために各学生に表現させることを目的とする場合は、対面講義の時間にあえて問い、それを考えさせる時間を講義内で取るよりも、オンデマンド教材を用いた事前課題や復習の事後課題を課し、そこに個々人にまとめさせる。そしてその記載を読み取り、問いに対する回答からその理解度を確認する。その後、その書き込みを活用して、次の仕掛けとなる論議へ導く問いを講義の中で投

表4 校種による課題に対する回答要約例

	問いかけ	就学前・初等教育(n=153)	中等教育(n=112)
Q.2-1	Q.2-1 1998年告示～2017年告示の間、3回の学習指導要領の改訂で、総合的な学習の時間の時数に減ってきているが全体の授業時間数は増えている。総合的な学習の時間が減り、その分算数、理科、体育、外国語活動、国語、社会といった他教科の時数が増えている。しかし、国語や算数、数学といった主要科目の授業時数の増加するものの、総合的な学習の時間の授業時数は減少していった。	平成10年、20年を経て、総合的な学習の時間の時数は減ってきているが全体の授業時間数は増えている。総合的な学習の時間が減り、その分算数、理科、体育、外国語活動、国語、社会といった他教科の時数が増えている。しかし、国語や算数、数学といった主要科目の授業時数の増加するものの、総合的な学習の時間の授業時数は減少していった。	学習指導要領の改訂により、小学校での総合的な学習の時間の授業時数は減少し、代わって国語、数学、体育などの授業時数が増えている。現在の全体の授業時間が多いが、移行期間中の小学校の標準時間数などを見ると、総合的な学習の時間の授業時数は年々減っている。総授業の時間数は平成10年、20年と改訂を重ねていくたびに、増加しているが、総合の時間が減っている。
Q.2-2	Q.2-2 総合的な学習の時間は、各教科学習、特別活動、道徳教育とどのような関係にあるのか？	総合的な学習の時間は、横断的・総合的な問題解決の能力を養い、実社会における横断的・総合的な問題解決に取り組む態度を養うことを目標としている。道徳的な学習や特別活動、教科学習すべてとつながり、それぞれの学習の課題を解決しようとしながら関わりを見つけて解決しようとする。 <b>「総合的な学習の時間」は他の教科と違い、教科書がなく、目標の実現のため各学校が判断した教材を用いて課題を設定する。</b>	そして、そこで身に付けた様々な能力を、総合的な学習の時間において使うことで、実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力を身につけることができる。 <b>総合的な学習だけで完結するのではなく、各教科と関連づける</b> ことで様々な知識を基に課題を解決するという能力を育くことができる。 総合的な学習の時間は、各教科学習や、特別活動、道徳教育との連携(教科横断的な学習)を促すなどの作用を持つ科目ではないかと考える。
Q.2-3	Q.2-3 どのような点に気をつけて、また工夫をして、学校で総合的な学習の時間を実践していこうと考えますか？	その際に、教科で学んだ見方・考え方を生かすことのできるような課題を設定することで、教科の学びも深めることができると考えた。また、 <b>学校外での学習では、児童・生徒らの学びはより深くなる</b> と感じるため、積極的に活用していく必要があると考える。 <b>ねらいや育みたい力について明確にし、何のために学ばせるのかを教師側が意識して授業を作っていくことに気をつけたい。</b>	<b>生徒がその時間で何を学んだのかが分かるように目標をしっかりと伝え、相互学習ができるように工夫をし、実践したい。</b> よって、学校外で学ぶことをより計画的に設定し、協力する方々の連携や相談をうまくすることを総合的な学習の時間に含めなくてはならない。 その一方で、思考力・判断力・表現力の育成ができていたり、探究的な学習を行う実践が進められているなど成果も挙げられている。
Q.3-1	Q.3-1 ESDの考え方に基いて、学校の総合的な学習の時間をカリキュラム・マネジメントするということはどのようなことが、自分の理解を説明してください。	この考えに基づいて総合的な学習の時間をカリキュラム・マネジメントをするということは、 <b>各学校や地域の実態からその状況を踏まえて身近な課題について考えること</b> だと思った。また、PDCAに基づいた活動を行う中で仮説を立てた後、実践したことに基づいた重要な新たな活動に生かすなどの計画性(2)も重要である。 ESDと総合的な学習を関連付けると、特に①批判的に考える力③多面的、総合的に考える力④コミュニケーションを行う力⑦進んで参加する態度などが特に重要視できると考えられる。	<b>ESDの考え方に基いて、学校の総合的な学習の時間をカリキュラム・マネジメントするとは、持続可能な社会を実現するための総合的な学習の時間の授業案を作る、ということ</b> である。 ESDは持続可能な社会づくりの担い手を育てる教育であることから、ESDの考え方に基くことこの内容の2つは持続可能な学習形態だといえる。 つまり、ESDの考え方に基いて総合的な学習の時間をカリキュラムマネジメントすること、ESDの観点で考えることを通して必要な資質・能力を養えるよう計画することである。
Q.3-2	Q.3-2 A中学校区の総合的な学習の時間のカリキュラムの編成例から、その指導計画と実施計画の工夫を読み取ってみましょう。	何に着目しどのような力をつけようとしているのか、計画が実施されていくためにどのような工夫をしているか。 小中連携によるカリキュラムの開発を進めていて、長期にわたって総合の授業の見直しを立てている点が工夫されていると思いました。 A中学校では、協力できる力や自分で判断する力、自分で計画を立てて見直しを持って取り組む力、自ら考える力の育成を目指している。	自立する力・考える力・見通す力・協力する力をつけるために、キャリア教育の視点を踏まえたふさと学習の小中連携によるカリキュラムの開発が図られている。 地域や学校の特色に応じた課題に着目し、そこから自立する力・考える力・見通す力・協力できる力など身につけさせようとしている。 これらの取り組みの中で特に、主体性・コミュニケーション・支援ツールに着目し、自立する力・考える力・見通す力・協力できる力をつけようとしている。
Q.3-3	Q.3-3 あなたが総合的な学習の時間の年間指導計画を提案するとき、単元配列4つの型どれを薦めますか？その理由をまとめてください。(ある校種を取り上げた事例あり：小中を含む中学校区)	また、小学校では6年間といった長い時間を共にする子ども達だからこそ、 <b>互いのコミュニケーションはできる限り良い状態に保つのが良いと考える。</b> ある中学校は、自然が多い山のふもとに立地しており、学校周辺の自然を保護する取り組みが続けられた歩みがある。 ある学校では山間部に位置し、ウメ栽培が盛んですがその後継者不足と梅への無知認識が課題となっています。	分散型、年間継続型、並列型、複合型の4つでは <b>年間継続型が総合的な学習の時間では良いのではないかと感じる。</b> 同じ題材の中でも、簡単に順序で区切ることができ、生徒の意見を聞いて反映させる工夫があればなおよいと考える。 ある中学校は大阪城にすぐ近くにあり、大阪城の歴史や、大阪城の外堀にある並木や梅林、桃園などの自然に一年中触れ合うことができる。
Q.4-2	Q.4-2 信頼される評価と聞くと、ここまでの資料を参考に、どのような目的のときに、どのような評価方法を選ぶのか、あるいは組み合わせで用いるのか、あなたの考えを整理し、まとめてみましょう。	<b>子供たちが最終的に何を成し遂げたかを評価するときは制作物による評価、第三者評価自己評価・相互評価を組み合わせて行う。</b> パフォーマンス評価は課題の中で身に付けた力どのように生かすことができているかで評価するものである。 観察による評価、ポートフォリオに評価、制作物による評価、パフォーマンス評価、大業者評価、個人内評価などが資料で挙げられている。	生徒の理解度を評価することを目的とした際には、制作物による評価とパフォーマンス評価が適していると考えます。 また、活動の過程や軌跡に重点を置いて評価する方法として「観察による評価」や「ポートフォリオによる評価」がある。 <b>身に付いた力を発揮している姿や個性や独創性を評価することを目的とする場合にパフォーマンス評価を選ぶ。</b>
Q.5-3	Q.5-3 A中学校の総合的な学習の時間の取り組みは、Cross- or multidisciplinary、Interdisciplinary、Transdisciplinaryの3つのうち、どのアプローチに近い取り組みと言えるか？資料を下に根拠を説明しながら、あなたの考えを述べてください。(ある校種を取り上げた事例あり：中学校)	私は、A中学校の総合的な学習の時間の取り組みは、Transdisciplinaryのアプローチに近い取り組みと言えるのではないかと考えた。1と2の往還の経験を大切にしている、Cross- or multidisciplinaryも論理的思考を重視しているからです。 さまざまな分野間の組み合わせを促進した活動であるためにA中学校はTransdisciplinaryのアプローチに近い取り組みであると考えられる。	このような取り組みはSTEAM教育の中でのCross- or multidisciplinary：教科横断に重きを置いているのかと感じた。 A中学校の総合的な学習の時間の取り組みでは、三つの要素のうち特にTransdisciplinaryを意識した学習が行われていると感じた。 この3つのアプローチは段階的なもので、接触的、横断的、統合的と訳すことができるのではないだろうか。

げかけ、関係認識や理解を深めることの方が、講義内の学習過程の改善として適しているかもしれないと考えられた。

なお表4の結果より、(Q.2-2) (Q.2-3) (Q.3-1) (Q.3-3) (Q.4-2)などは、校種間で異なる特徴的な受け止めが見られことから、むしろ校種を混ぜて、専攻でクラスを分けた方が論議を活発化する可能性があること、またそれを導く内容の課題や問いであることも考えられた。

#### 4.2. 校種・専修によって受けとめ方に差はあるか？

次に同じ内容のオンデマンド教材を用いた場合、校種・教科専修（例えば国語・数学）によってその受け取り方に差がみられるかについて述べる。表6は、第2回から第5回について、講義内容に対する課題に関わって、国語（小学校と中学校）と数学（小学校と中学校）で受け取り方に差がみられたかを、テキストマイニングの要約機能を用いて分析し、特徴的な結果を示した部分（下線斜字体）を取り上げている。そして全4回、12の課題に対して、校種・教科専修（国語から家庭）によって受け止め方に差があったか、を1つの表にまとめたものが表5である。記号に関して、○：同じ専修で異なる校種ごとに特徴的な表現がみられる、△：同じ専修で異なる校種のどちらか一方に特徴的な表現がみられるを示している。

ある校種を取り上げた内容説明や資料提供がなされる場合、当該校種の事例でなくとも、(Q.3-3) 説明を聞いて資料分析して、自分ならどれを薦めるか判断をさせ、その根拠を考えさせる問いかけは、数学の受講生には受け取られることが要約から読み取れた。そして(Q.4-1)のように

説明を聞いて、そこで書かれている事実の理解に向けてまとめさせる問いかけは、国語と家庭の受講生には受け取られることが読み取れたが、専修によって差が見られた。

また(Q.2-3)のように説明を聞いて、資料を読み取って、自分のアイディアをまとめて表現させる問いかけや、(Q.3-1)のように説明を聞いて資料を分析して考えを表現させる問いかけは、校種ごとに異なる理解や表現をすることを導く可能性があることが読み取れた。

ここから上記のような問いかけの場合、校種でクラス分けするよりも、教科専修を意識したクラス分けをした方が論議を活発化する課題や問いであることも考えられた。

一方で1)(Q.2-1) (Q.5-1)のように説明を聞いて、そこで書かれている事実の理解に向けてまとめさせる問いかけや、2) (Q.5-3)のように、ある校種の事例を取り上げ、説明を聞いて資料を分析して根拠を挙げながら問いに対する解釈を求める問いかけは、同専修の校種間で特徴的な表現が生まれにくく、校種共通に同じ回答傾向がその表現から見られた。このことから、事実理解を導くことは講義にとって意味あることではある。しかしこのような問いかけで、論議をさせ思考をアクティブにさせることは、先の4.1.の考察と同様に、校種が異なる教科専修に目を向けた場合であっても同様に、学生間に理解の違いや論議を導くことは容易でない問いかけであることが確認された。結果このような問いかけは、校種が異なる教科専修ごとの学生間で対面で論議させる問いかけには適さず、ある理解を導くこと、それを確かめるために各学生に表現させるのであれば、オンデマンド教材でも可能であることが読み取れた。

表5 校種・教科専修によって受け取り方に差がみられる課題

講義	内容	問いかけ	国語	数学	社会	理科	保健	音楽	美術	家庭	
第2回	学習指導要領における総合的な学習の時間の位置づけ	Q.2-1 1998年告示～2017年告示の間、3回の学習指導要領の改訂で、総合的な学習の時間はどのように変わってきましたか。ここまでの資料に基づき、明らかになったことをまとめてください。									
		Q.2-2 総合的な学習の時間は、各教科学習、特別活動、道徳教育とどのような関係にあるのか？	△	△		△	○			△	
		Q.2-3 どのような点に気をつけて、また工夫をして、学校で総合的な学習の時間を実践していこうと考えますか？	○	○	○	○	△	△	○		
第3回	総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメント（指導計画と実施計画）	Q.3-1 ESDの考えに基づいて、学校の総合的な学習の時間をカリキュラム・マネジメントするということはどういうことか、自分の理解を説明してください。	○	○	○	○	○	○	△	○	
		Q.3-2 A中学校区の総合的な学習の時間のカリキュラムの編成例から、その指導計画と実施計画の工夫を読み取ってみましょう。	○	△			△	○			△
		Q.3-3 あなたが総合的な学習の時間の年間指導計画を提案するとき、単元配列4つの型のどれを薦めますか？その理由をまとめてください。（ある校種を取り上げた事例あり：小中を含む中学校区）		○	△			△	△		△
第4回	総合的な学習の時間の単元計画の作成	Q.4-1 資料などに基づいて、総合的な学習の時間の単元設計の手続きについて、自分の言葉でまとめてみましょう。（ある校種を取り上げた事例あり：小学校）	○							△	○
		Q.4-2 信頼される評価と関わって、ここまでの資料を参考に、どのような目的のときに、どのような評価方法を選ぶのか、あるいは組み合わせで用いるのか、あなたの考えを整理し、まとめましょう。	△	○	△	△	△	○			
		Q.4-3 総合的な学習の時間における学びの評価について、単元レベルの評価の場合、何を大切に、留意して、どのように進めたいのか。		○	○	△	△	△	○		
第5回	総合的な学習の時間の指導「理解させる指導」からの転換	Q.5-1 総合的な学習の時間の単元設計において、「探究的な学習」と「PBL (Project-based Learning)」と「ICT等の活用」の関係は、どのような意味を持つと、あなたは考えますか？	△	△							
		Q.5-2 この総合的な探究の時間の学習の流れ（展開）、課題設定シート、選択肢カードなどについて、あなたはどのように考えるか？さらに工夫した方が良い点はあるか（ある校種を取り上げた事例あり：中等教育）？		○	○			△	○	○	
		Q.5-3 A中学校の総合的な学習の時間の取り組みは、Cross- or multidisciplinary, Interdisciplinary, Transdisciplinaryの3つのうち、どのアプローチに近い取り組みと言えるか？資料を下に根拠を説明しながら、あなたの考えを述べてください。（ある校種を取り上げた事例あり：中学校）									



表6 校種・教科専修（国語・数学）ごとの課題に対する回答要約例

質問項目	問いかけ	小学校国語(n=14)	中学校国語(n=12)	小学校数学(n=15)	中学校数学(n=12)
Q2-1	Q2-1 1998年告示～2017年告示の間、3回の学習指導要領の改訂で、総合的な学習の時間はどのように変わってきましたか。これまでの資料に基づき、明らかになったことをまとめてください。	1998年の告示から現在にかけて、総合的な学習の時間の時間は、小学校、中学校ともに徐々に減ってきていることが明らかになった。そして最新の改訂では自ら課題を発見、設定しそれを主体的に分析、試行する力を育成することが重要視された。また、2011年以降の新課程では3～6年生で70時間に統一され、空いた時間は国語や社会、体育に充てられた。	他の科目は授業時数が増えているものもあるため、総授業時数を変化させないために減少した。このような授業時数の変化は、各教科における知識や技能をより高めることにあるのではないだろうか。それと同時に、新設の科目が生まれ、既存の科目に割り当てられていた時間が増えたりしている。	2017年告示の全体の授業時数の合計時間は増えているのに、総合の授業時間は減っていた。また平成21、22年度から平成23年度以降にかけては後20時間減り、その代わりに国語や社会などが増えている。小学校では時代と共に時間数が減り、その代わりに国語や算数、外国語の時間が増えている。	これは総合的な学習時間の必要性が薄くなったのではなく、学校が主体となって自由に決められるようになったことが挙げられる。また平成20年の中央教育審議会答申では、総合的な学習の時間の必要性と重要性が再確認され、位置づけの確立や、横断的・総合的な学習の明確化が提言された。総合的な学習の時間の必要性と重要性の再確認を行い、位置づけの明確化や、横断的・総合的な学習や探究的な学習の明確化をする。
Q2-3	Q2-3 どのような点に気をつけて、また工夫をして、学校で総合的な学習の時間を実践していると考えますか？	また、内容としては、地域や学校の繋がりを意識し、連携を取ったうえで、 <b>児童生徒の興味関心に基づくものを提供していくべき</b> であるとする。児童・生徒が課題を見つけ、探究的な学習ができるように体験的な活動や他教科との関連から疑問を持たせる工夫をして、総合的な学習の時間を実践したいと考える。座学でも作りや食べ物の大切さは学べるが、幅を越えるときの大変さなどは実際に体験しないと分からないし、できるだけ生の体験をさせてあげたいものだ。	総合的な学習の時間を実践するにあたり、まずは課題設定について、教科だけでなく学年や校種をも横断する課題設定を意図したいと感じた。これらの成果を生かすには、活動の目的や意義を明らかにし、 <b>児童生徒自身に学習活動の意図を把握させる必要がある</b> 。そのため、より教科横断的な内容で、児童生徒に身近なところからの学びを目指す必要があるのではないだろうか。	<b>地域などの学校外での繋がりを意識して様々な活動をしていくことが必要になってくる</b> と思います。また、班で一枚のポスターを作るので短い時間で役割を分ける必要がある、非常に協力が重要となる。発信することで、さらに地域の人の協力を得やすく、学校だけでなく地域全体で子どもを育てるという環境が整うと考える。	具体的には、協力する方々と直接会うことが出来ない場合には、ウェブ会議システムなどを活用し、子どもたちの学びを豊かにしていく工夫をする必要がある。 <b>教科の授業では授業時間内で完璧に解決することができると、総合的な学習の時間ではあえて解決することができなくてもよいのではないかと考えた</b> 。探究とは <b>まず好きなことから始めるべきであり、教師が課題を与えるものではないと考える</b> ので、その点を工夫して授業を行えたいら良いと思う。
Q3-1	Q3-1 ESDの考え方に基いて、学校の総合的な学習の時間をカリキュラム・マネジメントとすることはどうか、自分の理解を説明してください。	総合的な学習の時間で用いる教材には <b>学校や学級の児童の実態に合わせた教育内容を準備すべき</b> なので、 <b>児童のことを考え、一人一人がコミュニケーションを取り協力し合いながら進めることができる内容</b> にする。児童・生徒たちにとって <b>身近な地域の課題や、自分たちの生活を学校の課題などについて、客観的に把握し、そこから課題を見つけ、より良い方向に解決していく</b> ための方法を考えていくこと。まず、ESDの視点に立った学習指導で育むことが出来ると思われるのは、批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的・総合的に考える力、コミュニケーションを行う力等が挙げられる。	ESDにおいては、 <b>世界における諸問題を捉えごととして捉え、身近なところからその解決になるようなことを考え、取り組んでみる</b> ということが出来る。それらの課題見解決能力が身近なところ養われ、そして発揮されればESDの考え方が反映されたと言えるのではないだろうか。 <b>特に、1,2回生の学習を通してESDの理念について学んできたが、これを総合的な学習時間に組み込むと、とても嬉しいと思う。</b>	小学校低学年のうちは自分のすんで地域を調べて自分が住んでいるこの市、町、村の今について考え、高学年でその未来について考える。しかし、日本には英語を話す国の人だけではなく、たくさん他の国の人が入り住んでいたり、外国にルーツをもつ児童生徒もたくさんいる。ESDの考え方に基いて総合的な学習の時間で <b>一番重要となっていく内容は身近な人や行事のこれらから考えていくことが重要か</b> と思います。	グループ活動を取り入れ、話し合い、協力して調査やまとめ、発表を行い、協同的な学びをすることも、ESDを効果的に推進することにつながる。これらの関係性をより明確に、学び得るようなカリキュラムを編み出すことがESDの考え方に基づいて、総合的な学習の時間における <b>カリキュラム・マネジメント</b> をすること、その意義であるとする。そして、 <b>これらの学習を通して、課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す。</b>
Q3-3	Q3-3 あなたが総合的な学習の時間の年間指導計画を提案するとき、単元配列4つの型のどれを薦めますか？その理由をまとめてください。（ある校種を取り上げた事例あり：小中を含む中学校区）	一年を通して地域のことをより深く知っていくことで、身近な人との関わりや自分の考えを広げまわすことになると考えられる。また、小学校では6年間といった長い時間を共にする子ども達だからこそ、互いのコミュニケーションをはかるといい状態に保つのが良いと考える。ある中学校は、自然が多い山のふもとに立地しており、学校周辺の自然を保護する取り組みを続けてきた歩みがある。	これを達成するにはさまざまな学習や体験、人との関わりを通して成長していくことが大切だと考えられる。この配列では、当然すべきことを自ら進んでやること、お互いに信じあいたい思いの優しい心を持つことを重んじている。個人、集団それぞれで課題への取り組み方を学べることが期待できるという点で、権衡型を推薦する。	<b>小学生の児童の中には最終的なものが過ぎると親愛感が無くなってしまいがちなことを止めてしまおう</b> ことも少なくありませんでした。ある学校は、周りに神社や山、田んぼ、ぶどう園があり、地域の文化が発達しており、自然が豊かな場所にある。また、様々な環境下にある人々の集まりにより、より多くの意見や考えが集まりより良い成果を得られると思う。	なぜなら、ある中学校は集団で活動することを大切にしていた歩みがあり学年、学級それぞれ違った学習集団で活動することができるからです。 <b>地域の方には毎年この時期になると小学校からお呼びがかかるという慣習にもなっており地域に密着しているというメリットもある</b> と考える。その上で <b>1,2年生ではそもそも総合的な学習の時間での活動はどのように行うのかを知り、またそれらへの興味関心の維持のため、分散型で実施</b> 。
Q4-1	Q4-1 資料などに基づいて、総合的な学習の時間の単元設計の手続きについて、自分の言葉でまとめてみましょう。（ある校種を取り上げた事例あり：小学校）	まず、全体計画・年間指導計画を踏まえたうえで、3つの視点から中心となる活動を考える。 <b>児童の興味と教師の願いを結びつけて、どのような活動にするかを考えていく</b> 。指導案を書く作業に移る前に、 <b>（活動の実現が可能かどうかを検討）</b> する必要がある。	教材の意図を示す際には <b>ウェビングシートを用いるなどして可視化</b> すると良い。この三要素はそれぞれに関連性を持ったうえで設計されるべきである。総合的な学習の時間の単元設計の手続きについて、まずは全体計画・年間指導計画を踏まえる。	<児童の興味関心><教師の願い><教材の特性>の、三つの視点から中心となる活動を思い描く。総合の単元は課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめて構成されている。全体計画・年間指導計画を踏まえる…学年全体、必要であれば学校全体での（連携）を行う。	授業の評価を行い、改善策を見つけて出し、全体計画・年間指導計画の改善を行い単元設計を繰り返す。道徳軌道修正しながら、その時にこうした方がよい授業になると考えた場合は内容を変更する。背景に持っている姿や地域による特徴など具体的に思い浮かべ、教師間で共有することが大切である。
Q5-1	Q5-1 総合的な学習の時間の単元設計において、「探究的な学習」と「PBL(Project-based Learning)」と「ICT等の活用」の関係は、どのような意味を持つと、あなたは考えますか？	ICT等の活用は多様な子どもたちを誰一人取り残さずことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できるようにさせる。「探究的な学習」は総合的な学習の時間にご必要なものだと考えられるので、上記3つのような関係を作っていくは効果的に学習を進められると言える。PBLは探究する課題やその流れの構築に役立つものであり、活動期間や規模によって“Project”か“Program”かの選択をする必要がある。	このように、 <b>ICTには、探究をスムーズに効果的に行うことができるという意味がある</b> と考えられる。ゆえに、PBLによって、膨大な情報や他者と接するときに円滑に進めることができるようになると思う。探究的な学習とPBLでは、PBLが探究的な学習の学習効果を引き上げるという関係にあると思う。	また、ICT等の活用によって、学習者一人一人が平等に学習を受けることができ、情報収集や課題設定などがよりしやすくなると考えます。この問題を用いることで <b>児童たちは何を把握と感じ、何ができないのか、学びの傾向を視覚化する</b> ことが大切である。探究的な学習の課題設定をし、PBLのサイクルで課題解決させる中でICTが効果的に用いられるように単元設計を行う必要があると思う。	単元設計において、ICT等の活用は、子どもたちが問題を探究するうえで、必要な学習環境を整えるという意味を持つ。そして、「探究的な学習」では学習者中心の教科横断的な学習をすることが効果的である。探究的な学習の5つの局面を計画的、効果的に指導し、支援していく有効な方法としてPBLアプローチがある。
Q5-3	Q5-3 A中学校の総合的な学習の時間の取り組みは、Cross- or multidisciplinary, Interdisciplinary, Transdisciplinaryの3つのうち、どのアプローチに近い取り組みと言えるか？資料を下に根拠を説明しながら、あなたの考えを述べてください。（ある校種を取り上げた事例あり：中学校）	A中学校の取り組みでは、他のテーマの学びを体験する中で、サイエンスやアートなどその時々組み合わせながら問題解決を行っている。以上のことから、教科横断的に様々な活動を繰り返していきながら、 <b>Cross- or multidisciplinaryに近い取り組みである</b> と考える。	Using big ideas to drive natural connections between the disciplinesというところがあり、教科間に自然に接続するというところであると読み取った。大抵はscience, technology, engineeringの3点であり実生活でのこれらの結びつきをえられる話題であったから。総合的な学習の時間の学びの評価では、最後の結果だけでなく生徒の取り組みの過程もきちんとみていくことが大切だと考えた。	違う観点に対して、様々な手段を用いて目標に向かっていたのでこれが一番近いと思いました。資料から短歌という国語での学習から音楽に結び付けているのが複数の科目を含んでいると感じました。こういった多面的な面から考える方法は三つのTransdiscipalyでないのかなと感じました。	A中学校では授業中の資料から、生徒が総合的な学習の時間を通して自分の生活に結びつけ、生きていくための能力を身につけることに力をいれたいと読み取れる。また、その発表を聞き客観的な視点でどうであるか、発表者と意見を交流することで多面的に物事を見る習慣をつけることができる。関心喚起の取り組みを大事にしていて、今までに習った経験を大切にしているから。

### 4.3. 専修によってどのようにその受け取り方に差がみられるか

最後に同じ内容のオンデマンド教材を用いた場合、専修（幼年、特別支援、教育、心理ほか教科専修）によってその受け取り方に差がみられるかについて述べる。たとえば、表8は、第2回から第5回について、講義内容に対する課題に関わって、専修（幼年、特別支援、教育、心理）で受け取り方に差がみられたかを、テキストマイニングの要約機能を用いて分析し、特徴的な結果を示した部分（下線斜字体）を取り上げている。そして全4回、12の課題に対して、専修によって受け止め方に差があったか、を1つの表にまとめたものが表7である。記号に関して、○：専修で特徴的な表現がみられるを示している。

ある校種を取り上げた内容説明や資料提供がなされる場合、当該校種の事例でなくとも、(Q.5-2) 説明を聞いて資料分析して、自分ならどの方法や道具・環境が学習活動を導く際に用いるかを判断をさせ、その根拠を考えさせる問いかけは、比較的多くの専修の受講生に受け入れられ、思考を活性化させることが要約から読み取れた。このような問いは、専修ごとに異なる特徴的な回答もみられることから、対面授業で議論をさせながら考えさせたいとき、校種によるクラス分けのままでも、十分に多様な考えが表れ論議ができる可能性が読み取れた。

(Q.2-3) のように説明を聞いて、資料を読み取って、自分のアイディアをまとめて表現させる問いかけや、(Q.3-1) のように説明を聞いて資料を分析して考えを表

現させる問いかけ、(Q.4-3) のように資料を基にしながらも独自に考えることができる自由度のある問いかけは、専修ごとに異なる理解や表現をすることを導く可能性があることが読み取れた。このような問いの場合も、校種を意識したクラス分けで、十分に論議を活発化する課題や問いであることが考えられた。

一方で1)(Q.2-1) (Q.5-1) のように説明を聞いて、そこで書かれている事実の理解に向けてまとめさせる問いかけや、2) (Q.5-3) のように、ある校種の事例を取り上げ、説明を聞いて資料を分析して根拠を挙げながら問いに対する解釈を求める問いかけは、「総合的な学習の時間は小学3年生から始まっていて、学習指導要領が改訂するたびに授業時数が減ってきている」「探究的な学びを行う上で学習手段や学習環境として、ICT等の活用がされている」など、ほとんどの専修で共通に同じ回答傾向が要約表現から見られた。このような問いかけは、資料に書かれていることを学生が取り出して応える傾向と見られるため、個々人の理解を確かめることを主目的にするなら、オンデマンド教材で、個別に回答させることで対応可能と読み取れた。

## 5. おわりに

目的1) 「対面になったときにも生かせる教材の内容や構成、語りかける言葉や問いの方法」と関わって

1)(Q.2-1)(Q.3-2) (Q.4-1) (Q.5-1) のように説明を聞いて、そこで書かれている事実の理解に向けてまとめさせ

表7 専修によって受け取り方に差がみられる課題

講義	内容	問いかけ	幼年	特支	教育	心理	国語	数学	社会	理科	保健	音楽	美術	家庭	技術	英語	書道	文化	
第2回	学習指導要領における総合的な学習の時間の位置づけ	Q.2-1 1998年告示～2017年告示の間、3回の学習指導要領の改訂で、総合的な学習の時間はどのように変わってきましたか。ここまでの資料に基づき、明らかになったことをまとめてください。	○	○		○		○			○	○						○	
		Q.2-2 総合的な学習の時間は、各教科学習、特別活動、道徳教育とどのような関係にあるのか？	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第3回	総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメント（指導計画と実施計画）	Q.3-1 ESDの考え方に基づいて、学校の総合的な学習の時間をカリキュラム・マネジメントするということはどういうことか、自分の理解を説明してください。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		Q.3-2 A中学校区の総合的な学習の時間のカリキュラムの編成例から、その指導計画と実施計画の工夫を読み取ってみましょう。						○				○					○		
		Q.3-3 あなたが総合的な学習の時間の年間指導計画を提案するとき、単元配列4つの型のどれを薦めますか？その理由をまとめてください。（ある校種を取り上げた事例あり：小中を含む中学校区）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第4回	総合的な学習の時間の単元計画の作成	Q.4-1 資料などに基づいて、総合的な学習の時間の単元設計の手続きについて、自分の言葉でまとめてみましょう。（ある校種を取り上げた事例あり：小学校）	○				○				○			○					
		Q.4-2 信頼される評価と関わって、ここまでの資料を参考に、どのような目的のときに、どのような評価方法を選ぶのか、あるいは組み合わせる用いるのか、あなたの考えを整理し、まとめてみましょう。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		Q.4-3 総合的な学習の時間における学びの評価について、単元レベルの評価の場合、何を大切に、留意して、どのように進めたいのか。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第5回	総合的な学習の時間の指導「理解させる指導」からの転換	Q.5-1 総合的な学習の時間の単元設計において、「探究的な学習」と「PBL (Project-based Learning)」と「ICT等の活用」の関係は、どのような意味を持つと、あなたは考えますか？						○										○	
		Q.5-2 この総合的な学習の時間の学習の流れ（展開）、課題設定シート、選択カードなどについて、あなたはどのように考えるか？さらに工夫した方が良い点はあるか（ある校種を取り上げた事例あり：中等教育）？	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		Q.5-3 A中学校の総合的な学習の時間の取り組みは、Cross- or multidisciplinary、Interdisciplinary、Transdisciplinaryの3つのうち、どのアプローチに近い取り組みと言えるか？資料を下に根拠を説明しながら、あなたの考えを述べてください。（ある校種を取り上げた事例あり：中学校）																	○



表8 専修（幼年、特別支援、教育、心理）ごとの課題に対する回答要約例

問いかけ	幼年教育(n=13)	特別支援教育(n=12)	教育学(n=16)	心理学(n=15)
Q.2-1 1998年告示～2017年告示の間、3回の学習指導要領の改訂で、総合的な学習の時間はどのように変わってきましたか。これまでの資料に基づき、明らかになったことをまとめてください。	<p>また指導要領が改訂されることに新しい科目や出てきたり調整されている授業があることもわかりました。</p> <p>平成10年から平成29年までの3回の学習指導要領の改訂の中で、総合的な学習の時間は、小学校、中学校ともに授業時数が徐々に減った。</p> <p>幅がなくなったのは総合的な学習の時間の必要性や重要性が再確認され、明確な位置づけが行われたからではないかと考える。</p>	<p>平成10年以降に総合的な学習の時間が新設されたが、平成元年と比較すると平成10年の方が全体の授業時間数は減っている。</p> <p>平成20年以降、移行期間を経て平成23年(中学は平成24年)の新課程では現行と同じ授業時間数に減った。</p> <p>平成29年度に告示されたものは高学年の総授業時数は多くなっているが総合的な学習の時間の授業数は少なくなっている。</p>	<p>全体としての授業時数はどの学年においても増えてきているが、総合的な学習の時間はどの学年も減ってきている。</p> <p>平成元年の改訂から授業の総時間数がへり、10年度の改訂から総時間数は増えていることが見て取れる。</p> <p>平成20年1月に、位置づけの明確や、横断的・総合的な学習や探究的な学習の明確化が提言される。</p>	<p>学習指導要領は子ども達にどんな力をつけさせたいかに焦点を当てて、10年おきに作成されている。</p> <p>学習指導要領が改訂されていくにつれて、全体の授業時数は増加したが、総合的な学習の時間はその一方で減少していた。</p> <p>理由として脱ゆとり教育が始まり、教科学習の時間を大幅に増やしたことが原因だと予想される。</p>
Q.2-3 どのような点に気づけて、また工夫をして、学校で総合的な学習の時間を実践していると考えますか？	<p>地域や学校の特色に応じた課題を設定することで、自らインタビューしたり実際に足を運んで調べることが出来るので、探究的な見方考え方をもって取り組むことが出来る。</p> <p>これまでの総合的な学習の時間の中では、教師の直接的な指導の下で「教室」で行われることが多いとあったため学校外での活動を多く取り入れていきたいと考える。</p> <p><b>地域の中でも、地理や植物・産業など各教科等にも関わることがあると思うため、教科横断的な活動へ発展していくことが出来るのではないかと考える。</b></p>	<p>総合的な学習が知識・技能の定着と思考力・判断力・表現力の育成の両方につながるには、総合的な学習の取り組みが重要である。</p> <p>総合的な学習は、各教科等の必要な知識と児童生徒自身の考えを加えながら深い学びに繋げることが今日の課題への克服の一つだと考える。</p> <p><b>児童生徒の疑問や気づきに重きを置き、その問題解決に向けてどのような方法が使えるか、最速かを自分たちで考え実施することが出来るような授業がよい。</b></p>	<p><b>学校や地域の特色を生かした学習にするためにも、地域や保護者との連携を行っていることが大切</b>である。</p> <p>その時々でどのような力を身に付けることを目標にしているのかの見通しをもつことが重要である。</p> <p>これからの総合的な学習の時間の授業は、教室だけでなく、地域や家庭との連携を重要視するのが大切であると感じた。</p>	<p>総合的な学習の時間で、実際の社会でできごとや問題を真剣に考えることで、児童一人一人が大きく成長することが期待されています。</p> <p>これに関しては、教師側がより実践的かつ実験的な活動を行い、評価することのできる授業を行っていくことが重要だろう。</p> <p>総合的な学習の時間で育てられる資質・能力は<b>やはり児童が考える時間とアウトプットする時間を多くとる事が重要になってくる</b>のではないかと考える。</p>
Q.3-1 ESDの考え方に基いて、学校の総合的な学習の時間をカリキュラム・マネジメントするということがどういうことか、自分の理解を説明してください。	<p>事前にこの内容の授業を何時間するなど伝えておき、最後にはクラスのみならずの前で発表することで子どもたちが自分たちの力で調べまとめあげるようにする。</p> <p>ESDと総合的な学習を関連付けると、特に①批判的に考える力③多面的・総合的に考える力④コミュニケーションを行う力⑦進んで参加する態度などが特に重要視できると考えられる。</p> <p><b>問題を解決するためには、教科横断的に、子ども達の関心や地域の実情に合わせて、必要となる人的・物的資源などを活用しながら行うべきだと感じた。</b></p>	<p>PDCAに基づいた活動を行う中で仮説を立てたり、実践したことに基づいたりして新たな活動に生かすなどの計画性②も重要である。</p> <p><b>前年度のカリキュラムを批判的に考え、未発表を予測して計画を立て、多面的・総合的に考え他者とコミュニケーションを取りながら総合的な学習の時間を構成する。</b></p> <p><b>カリキュラム・マネジメント</b>は、教育課程に基づき、学校、地域、子供の実態に合わせて課題を設定して、組織的かつ計画的に運営していくこと。</p>	<p><b>カリキュラム・マネジメント</b>は三つの側面から成り立っており、教科横断的な視点とPDCAサイクル、教育内容と多様な資源を効果的に組み合わせることを念頭に置いておかなければならない。</p> <p>教科の縦(各教科単元のつながり)と横(汎用的な力の育成を意識したつながり)のつながりを意識した<b>カリキュラム・マネジメント</b>をしていくのが必要である。</p> <p>地域が抱える問題に対し、持続可能な社会になるかどうかという視点から授業を作成していくことでESDにつながるのではないだろうか。</p>	<p>ESDの資質・能力は、総合的な学習の時間で探究的に学習する中で、より確かな力としていくことになる。</p> <p>総合的な学習の時間に関しては、教科横断的であり、学んだことを活用する探究的の状況などを積極的に評価することが重要になってくる。</p> <p>このような、力や態度を総合的な学習の時間の授業でも養っていくために、先ず地域の特色を活かした活動計画を取り入れる必要がある。</p>
Q.4-3 総合的な学習の時間における学びの評価について、単元レベルの評価の場合、何を大切に、留意して、どのように進めたいのか。	<p>学校全体では、前の学年の総合の時間で学んだことを生かせるように、<b>繋がりをもちた教育を心掛けるようにする</b>のが良いと思う。</p> <p>各教科の評価方法と同じような知識・思考・判断力などはもちろん個人内評価という観点評価には割り振られない<b>子どもたちの内面を評価することが大切</b>。</p> <p>知識・技能：課題の解決に必要な知識や技能を身につけ、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習の良さを理解している。</p>	<p>また、<b>単元の節目となる部分でどのような姿に変化しているのかを評価</b>することで総合的な評価に組み込むことができる。</p> <p>学校では、全体で方針を立てながら大切にし、留意して、PDCAを回しながら多角的な視点から評価するように進めていく。</p> <p>単元レベルの評価の場合は、一つの場面を評価するのではなく、今までの様々な姿や評価を振り返り行うことが重要である。</p>	<p>この評価としては保護者などに過程でどのようにしているかなどの評価をしてもらう第三者による評価を取り入れることも必要だと考える。</p> <p>また、総合的な学習の時間は社会における課題解決能力の育成も目標にあるため、実生活での姿勢もどのように成長しているかが大切になる。</p> <p>評価を児童のためだけにするのではなく教師の授業改善につなげたり、教材の吟味に使ったりする必要があるということ。</p>	<p>単元レベルの評価では決して教師一人が評価するのではなく、様々な視点から評価していくことが大切なのだった。</p> <p>留意点としては、総合的な学習の時間においては、児童のもっている良い点や進歩の状況などを積極的に評価することが重要になってくる。</p> <p>学年や学校で総合的な学習の時間の評価を定める場合、どの時期、どのタイミングで、どの方法で評価をするのかを共有し、揃える必要がある。</p>
Q.5-1 総合的な学習の時間の単元設計において、「探究的な学習」と「PBL(Project-based Learning)」と「ICT等の活用」の関係は、どのような意味を持つと、あなたは考えますか？	<p>総合的な学習の時間において、探究的な学習は課題を設定し、自分で調べる自己解決能力や、それらをまとめる力などを身につけることができる。</p> <p>「探究的な学び」とは、教科横断的で学習者中心の探究的な学習活動に関心する学校での取り組みのことである。</p> <p>探究的な学習とは自ら課題を設定し、課題解決に向けて情報収集し、まとめたり、その結果をもとに討論したりすることである。</p>	<p>「探究的な学習」は、教科横断的で学習者中心の探究的な学習活動に関心する学校での取り組みである。</p> <p>ICT機器のおかげで疑問に思ったことなどをすぐに調べることができるため学習活動をより一層充実させることができる。</p> <p>総合的な学習の時間では、学習者が課題を見つけて、その原因や関係などを調べて解決法を考える学習が主であると考えられる。</p>	<p>「ICT等の活用」は、データとして蓄積し整理することで、単元同士の関係性をより鮮明にするという意味をもつ。</p> <p>「PBL」と「ICT等の活用」は、「探究的な学習」を深める、効果的な手段・方法である。</p> <p>そのためにも、ICT等の活用をいかし学習の場を広げると同時に、学習環境の保持に努めていくことが大切である。</p>	<p>ICTを活用し集めたそれぞれの児童にその時必要な情報を、PBLをもとに上手く利用することが出来るようになる。</p> <p>ICTで情報を集めることができることを理解し、他教科でも活用し、教科横断的な学習もできるようになる。</p> <p>探究的な学習は、学習が自身で課題をみつめ解決することを目標として、教科横断的な学習を行うことを意味すると思う。</p>
Q.5-3 A中学校の総合的な学習の時間の取り組みは、Cross- or multidisciplinary, Interdisciplinary, Transdisciplinary の3つのうち、どのアプローチに近い取り組みと言えるか？資料を下に根拠を説明しながら、あなたの考えを述べてください。(ある校種を取り上げた事例あり：中学校)	<p>研究活動でも、研究を進めていくにあたって、様々な教科で学んだことを使って、探究活動を行っていく。</p> <p>各教科の学びを活用させたり呼び起させたりしているので、Transdisciplinaryのタイプだと思ふ。</p> <p>A中学校の取り組みで、短歌を作り、旋律をつけ、英語でも表現するという取り組みがあった。</p>	<p>どの場面での知識を使うべきなのか学べるようになっていくと感じたためCross- or multidisciplinaryであると考える。</p> <p>Cross- or multidisciplinaryは主に1年生の取り組みで、あらゆる課題に興味をもつために選ばれた課題に取り組んでいく。</p> <p>活動では、研究活動のスキルを上げる活動をしているけれど、分野は絞られているわけではなく教科横断的に様々な分野を学習しているため。</p>	<p>理由は、まず、このアプローチを翻訳すると、「選択したテーマにリンクされた分野のコンテンツ」となった。</p> <p>中学1、2年生は学問の分野や研究手段の基礎を学び、3年生で自分のやりたいテーマを絞れるようになっていく。</p> <p>A中学校の取り組みに国語の分野で短歌を楽しんだ後、音楽の分野で短歌に旋律をつけるというものがあった。</p>	<p>A中学は、教科同士の関連を強く意識しており、幅広く働きをかけているように見える。</p> <p>それぞれの学年でゴールが設定されているが、各学年での学びは交互に作用している。</p> <p>理由はPBL型の理解とPBL型の表現の往還を大切にしているという説明からである。</p>



る問いかけや、2) (Q.5-3) のように、ある校種の事例を取り上げ、説明を聞いて資料を分析して根拠を挙げながら問いに対する解釈を求める問いかけは、校種が異なっても専修が異なっても、特徴的な表現が生まれにくく、共通に同じ回答傾向がその表現から見られた。

このことから、事実理解を導くことは講義にとって意味あることであるが、このような問いかけで、論議をさせ思考をアクティブにさせることは難しい問いかけであることが確認された。結果このような問いかけは、対面で論議させる問いかけには適さない。ある理解を導くこと、それを確かめるために各学生に表現させるのであれば、オンデマンド教材で行う。そして目的に沿ってその結果を確認できる記述を課題を通じて行わせ、それを共通理解の基盤づくりとする。講義内では、共通理解を生かした次の問いかけを行い、理解の深まりにつなげることが意味を持つ。

(Q.2-3) のように説明を聞いて、資料を読み取って、自分のアイデアをまとめて表現させる問いかけや、(Q.3-1) のように説明を聞いて資料を分析して考えを表現させる問いかけは、校種ごとに異なる理解や表現をすることを導く可能性があることが読み取れた。

(Q.4-3) のように資料を基にしながらも独自に考えることができる自由度のある問いかけは、専修ごとに異なる理解や表現をすることを導く可能性があることが読み取れた。

免許所得希望の校種の事例でなく、ある校種を取り上げた内容説明や資料提供がなされた場合、(Q.3-3) のように説明を聞いて資料分析して、自分ならどれを進めるか判断をさせ、その根拠を考えさせる問いかけや (Q.4-1) のように説明を聞いて、そこで書かれている事実の理解に向けてまとめさせる問いかけは、校種を越えて受講生には受け入れられ場合もあるが、専修によっては、その受け入れに差が認められた。一方で、(Q.5-2) のように説明を聞いて資料分析して、自分ならどの方法や道具・環境が学習活動を導く際に用いるかを判断をさせ、その根拠を考えさせる問いかけは、比較的多くの専修の受講生に受け入れられ、多様な特徴的な表現も引き出せる傾向が見られた。

目的2) 「希望校種や専修専修の異なる学生に対して、どのように、「総合的な学習の時間の指導法」を展開していくか。そのクラス分けの方法」と関わって

取り上げる内容、課題によっては、校種で分けない方が多様な意見を生じさせ、講義で思考をアクティブにする可能性があることも読み取れた。

まず 1) (Q.2-2) のように説明を聞いて資料を分析して考えを表現させる問いかけ、2) (Q.4-2) のように説明を聞いて、資料を読み取って、自分のアイデアをまとめて表現させる問いかけは、専修で異なる考えが出るため、校種で分けた方が多様な意見を生じさせ、講義で思考をアクティブにする可能性が読み取れた。

次に (Q.4-3) のように資料を基にしながらも独自に考えることができる自由度のある問いかけ、(Q.5-2) の

ように説明を聞いて資料分析して、自分ならどの方法や道具・環境が学習活動を導く際に用いるかを判断をさせ、その根拠を考えさせる問いかけは、校種で分けても専修で分けても比較的多様な意見を生じさせ、講義で思考をアクティブにする可能性が読み取れた。

最後に、1) (Q.2-1) (Q.5-1) のように説明を聞いて、書かれている事実の理解に向けてまとめさせる問いかけや、2) (Q.5-3) のように、ある校種の事例を取り上げ、説明を聞いて資料を分析して根拠を挙げながら問いに対する解釈を求める問いかけは、理解に大きな差が生じなく、クラス分けはあまり関係ない問いであることが見えてきた。

## 付記

本研究は、日本カリキュラム学会第33回(名古屋大学web)大会の自由研究発表Ⅱ-5(2022.7.10)にて発表を行い、それをもとに、当日の質疑応答の内容を反映させまとめたものである。

## 参考文献

- 小池由美子(2021)「SDGs等をテーマとした課題探究学習の実践事例研究：『総合的な学習の時間の指導法』へのアプローチ」上田女子短期大学総合文化研究所報学海, 7, pp.43-58.
- 松崎康弘(2020)「新しい教職科目『総合的な学習の時間の指導法』の構想」鹿児島女子短期大学紀要, 57, pp.43-53.
- 宮崎充治(2021)「弘前大学全学教職科目での『総合的な学習の時間の指導法』(2020年度)初年度実践の覚書」クロスロード：弘前大学教育学部研究紀要, 25, pp. 55-62.
- 元根朋美(2018)「総合的な学習の時間の指導法の一研究：高校2年生に向けたキャリア教育の授業実践の考察を通して」帝塚山大学全学教育開発センター紀要, 2, pp.19-29.
- 宗形潤子(2022)「学生の意識の変容を生み出し、実践につなげていくための『総合的な学習の時間の指導法』の在り方についての一考察」福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要, 5, pp.1-10.
- 岡明秀忠(2017)「『総合的な学習の時間』の一考察—教職に関する科目『総合的な学習の時間の指導法』との関わり—」, 人間の発達と教育：明治学院大学教職課程論叢, 14, pp.15-42.
- 白井克尚(2021)「アクティブ・ラーニングを取り入れた『総合的な学習の時間の指導法』に関する実践研究—新型コロナウイルスの教材化を通して—」東邦学誌, 50(2), pp. 9-21.